

地域の文化発信基地

マミフラワーデザインスクールを訪ねて

令和5年10月18日に山王2丁目・天祖神社脇のスクールの川崎景介校長をお訪ねしました。創設者であり母上のマミ川崎が60年にわたって、暮らしを豊かにするという「現代フラワーデザイン」の普及活動について、花や自然を通して得たメッセージを情熱的に語っていただきました。

(編集委員横山 善朗・事務局大橋 彩乃)

1. マミ川崎の道のり(92歳でまだまだ元気です)

1950年、後のマミ川崎である唐笠真美子は縁あって4年間米国に留学し、ミズーリ州の大学で教育学を専攻しました。大学が休みの時はカンザスシティにある花屋でアルバイトに励み、花のテクニックを学ぶとともに暮らしの中で息づくアメリカの花のありかたに感銘を受けました。

1954年に帰国した後、親戚の紹介でサンケイ新聞に入社し、語学の特技を買われて社長秘書に抜擢され、その後婦人部の記者となります。

1958年、私の父、川崎景民との結婚を機に川崎真美子となった母はいったん主婦業に専念しますが、子育てが一段落すると何らかの活動をしたいと思い立ち、大好きな「花」と再び向き合うこととなります。話は前後しますが、母は雪ヶ谷教会における自らの結婚式の花を担当し、私の父方の祖父は、式当日に自分の胸元に着けられた手作りのブートニアに感動したようです。

2. 「フラワーデザイン」の普及

母の手作りのブートニアに感動した父方の祖父、川崎宗造は油を要しない軸受けであるオイルス・ベアリングのパイオニア「オイルス工業株式会社」の創業者でした。現在もいたるところで活用される画期的な発明を成した祖父と、その事業を受け継いだ私の父で夫の景民から「好きなことをやりなさい」と後押しされた母は、「花」を教える「花の教室」を始めました。近隣の方々に、花束やコサージュなどの作り方を教えるようになって間もなくの1962年、週刊誌『女性自身』に「花の教室」の活動が取り上げられます。その記事で、母はマミ川崎と名づけられ、彼女が実践していた創造的に花を活かす行為は「フラワーデザイン」と命名され、多くの人の知るところとなりました。

1960年代の高度成長期には、結婚するまで会社に勤めるという女性のライフスタイルが定着し、また花嫁修業として、手芸、裁縫、生け花などが普及しました。そんな中、1962年に日本初となるフラワーデザイン学校「マミフラワーデザインスクール」が開校しました。一定の型を持たない独創的な教育方針が人々の共感を呼び、現在では国内外合わせて350教室が活動しています。そこでは、「花の形より、花の心を伝えたい」というマミ川崎の想いを受け継ぐ方々が、日々花のある暮らしを楽しみながら感性を育み続けています。



展示カフェ机上

3. 川崎景介校長が提唱する「考花学(こうかがく)」

私、川崎景介は20年以上に渡り花と人とが織りなす多岐に渡る文化的背景について研究しています。人はなぜ花を愛するのか、どうして花は美しく見えるのか、世界の花にまつわる儀礼、フローラルアートの歴史、いけばな史、フラワーデザインの美的かつ歴史的役割、絵画に描かれる花、古典文学に出てくる花、花言葉などを掘り下げていくにつれ、花とそれを愛でる人類について思索にふけることはとても楽しく、フラワーデザインに携わる者にとって意義深いことであると実感しました。私はこの一連の思索を「考花学(こうかがく)」と名付け、その考えに基づき講演や執筆活動を行っています。



川崎景介校長

4. フラワーデザイン展開催

例年にわたり松屋銀座をはじめとした百貨店で、マミフラワーデザインスクール講師、生徒によるフラワーデザイン展を開催してきましたが、コロナ禍の影響のためしばらくお休みしています。2023年は12月1日(金)、2日(土)の両日に、マミフラワーデザインスクール・センター(山王2丁目)にてクリスマス作品展「Christmasに花をII」を開催しました。創始者マミ川崎とフラワーアーティスト川崎景太の特別出展作品をはじめ、およそ110点の作品をご来場の皆様にご覧いただきました。



フラワーデザイナー川崎景太とマミ川崎の作品を囲む



12月1日(金)クリスマス作品展にて

川崎校長の兄である川崎景太氏の枯草を使った作品を見て一言。「枯れているけど、枯れていない!」(事務局大橋) 何と素晴らしい表現だろう。まさに、感性!!楽しい取材でした。

OTAふれあいフェスタ

11月4日(土)・5日(日)の両日開催されました。

4年ぶりに賑やかな祭りに約19万人の方が集いました。入新井地区は太陽のひろばにて、両日ともに青少対をはじめとした地域団体の活躍で食べ物やジュースなどのサービスを行いました。特に、小さな子供さんにも人気のストラックアウトは両日で1,200人近くの参加でにぎわいました。



表彰

令和5年度
大田区青少年対策地区委員会
永年功労者表彰

加藤 康成 (入三西)

編集後記

区切りの99号を上梓できました。編集委員の皆様はじめ、関係の皆様にあらためまして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「感謝の心から歓喜がわく。歓喜は意欲と活力と創造の源となる。」という先人の言葉があります。

1号1号の地道な積み重ねを30数年間続けていただいた、諸先輩のご努力に感謝の思いでいっぱいです。後に続く私たちはこの感謝の心を忘れず、地域情報誌としての役割を忘れることなく更に精進してまいります。

今回は新たな出発の100号となります。紙面もより見やすく、多くの方に手に取っていただける情報誌を目指してまいります。関係の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

(編集長代行 白田 幸生)